

ウィーン体制の成立

1814年9月～1815年6月 【1: 】が開催された。

- 1) 会議は終始、オーストリア外相 (後に宰相) の【2: 】任1821-1848の主催で、その主導権の下に行われた。参加国は、**オスマン帝国を除く全ヨーロッパ諸国**。そのうち、イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセン、フランスは5大国とされた。目的は、フランス革命、ナポレオン戦争後の国際秩序の再建である。会議は、「**会議は踊る、されど進まず**」※1と風刺されるほど紛糾した。特にナポレオンにより服属国 (ワルシャワ大公国) として統合再建されていた【3: 】の処理は非常に紛糾した。ザクセンの処分問題も同様。

※1 「会議は踊る、されど進まず」(Le congrès danse beaucoup, mais il ne marche pas.) は、オーストリアのリーニュ侯爵シャルル=ジョセフの言葉といわれている。

『会議は踊る』とは、1930年代に日本でも上映されたドイツ製のオペレッタ映画。長引く会議の隙を縫った、ロシア皇帝アレクサンドル1世とウィーンの手袋屋の娘クリステルとの夢のような出会と別れを描く。彼女は、各国の首脳と随伴の貴族たちに店の広告付きの花束を投げていた。ロシア皇帝アレクサンドル1世の馬車に投げ込んだものが皇帝に命中。捕えられ鞭打ち刑を執行される寸前、事情を知ったアレクサンドルが仕置場に現われクリステルの赦免を求める。二人は気持ちを通じ、その夜は郊外の居酒屋で、店の歌手が歌う『新しい酒の歌』にグラスをあげる。彼女は彼が庶民でないのは知っているが、まさか皇帝だとは知らない。(以下割愛) ……なお、ヒトラーは退廃的だとして上映を禁止。日本でもアジア・太平洋戦争開戦後は上映されなかったが、この映画の主題歌『新しい酒の歌』と『唯一度だけ』は、学徒出陣の世代の青年たちもドイツ語で歌った(同盟国ドイツの作品だから許された)。旧制高校や旧制中学では英語以外にもドイツ語を外国語として教えており、彼らにとってドイツ語で歌うことは普通のことだった。当時ドイツ語の文献は現在以上に重んじられていたから大学でもドイツ語力が重要だった。ゼミナール (Seminar)、アルバイト (Arbeit=仕事) など大学で使われたドイツ語由来の言葉は少なくない。なお、『唯一度だけ』(Das gibt's nur einmal) は、アニメ映画 (2013 宮崎 駿 監督)『風立ちぬ』の中で避暑地の喫茶店でドイツ人のユンカースがピアノを弾くシーンで挿入曲として使われている名曲で、YouTubeで試聴できる。なお、1891年5月11日に日本訪問中のロシア帝国皇太子に警備にあっていた警察官が斬りつけて負傷させた天津事件の被害者はアレクサンドル3世(位1881-94)の皇太子(後のニコライ2世)。ウィーン会議に出席したアレクサンドル1世(位1801-25)はその80年も前の皇帝。

- 2) ナポレオンの再挙兵、帝位復帰(1815.3.1)を機に、ワーテルローの戦い(1815.6.18)直前の1815年6月9日に、ようやく議定書の調印が実現した。ここで確立されたのが【4: 】である！合意された国際文書名は「**ウィーン議定書**」で、この会議がオーストリアのウィーンで開催されたことによる。

第一次世界大戦後の講和会議はパリで開催されたのに、その戦後体制をヴェルサイユ体制と呼ぶ。主な条約のうち2本がヴェルサイユ宮殿で調印されたことからであろう。なお、この時の条約にパリ条約はない。

- 3) **ウィーン体制**とは、【5: 】後、19世紀前半のヨーロッパを支配した保守的な国際秩序をさす。1830年に揺らぎ、【6: 年】の諸革命によって崩壊し、メッテルニヒはイギリスに亡命した。

- 4) **ウィーン議定書**に書かれた基本原則は2つ。ウィーン体制の根幹はこれら。

- ① 【7: 】・・・敗戦国**フランスの外相**【8: 】※2が提唱 **メッテルニヒではない！**
 フランス革命前の政治秩序 (主権と領土) を正統とし、これ回復させること。
 すなわち、主権者 (国王) と領土 (国境線) を革命前に戻す。
 これによって、**フランス、スペイン、両シチリア王国**ではブルボン王朝が復活。(【9: 】)
 ② 【10: 】・・・大国間、特に5大国間の勢力均衡をはかり革命や戦争を回避する。
 (抜きん出た国が他国を支配しないようにする)

これを維持するための同盟は以下の2つ。神聖同盟は精神論のみ。四国同盟 (五国同盟) は実動部隊。

- 【11: 】 1815年9月、ロシア皇帝**アレクサンドル1世**がオーストリア、プロイセンに呼びかけ、**イギリス、オスマン帝国、ローマ教皇を除く** ※3 **全ヨーロッパの君主**が参加。
 単なる思想的な同盟である。宗教・平和・正義が目的とされる。
 【12: 】 1815年11月、**イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセン**で**結成**。
 (五国同盟) 1818年、アーヘン列国会議 11W でフランスを加え五国同盟に発展。自ら「**列強**」と称する。
 四国同盟 (五国同盟) は諸地域の変革の動きに干渉し、自由主義・国民主義運動を弾圧し、ウィーン体制を実質的に維持する役割を果たした。

☆メッテルニヒの嫌いなもの……こういうものはかづくでも押さえつける。

- ①身分的特権を否定し政治参加の拡大を求める**自由主義** (ブルジョワ階層が運動の担い手)
 ②民族の独立や国家の統一を求める**民族主義**や**国民主義** (ナショナリズム) No.126参照

※2 タレーランの老獪な政治手法をナポレオンは「絹の靴下の中の糞」と嫌悪したが、メッテルニヒとともに外交の天才。英仏の同盟関係を固め、19世紀、20世紀の英仏協調と同盟の基礎を作り、第一次世界大戦と第二次世界大戦を勝利に導いたのはタレーラン外交の遺産であった。メートル法の提案者とも言われる。

※3 ローマ教皇が神聖同盟に加わらなかった理由は、新教の国との同盟を避けたかったからであるとされている。

- 5) 具体的には: これらは**ウィーン議定書** 1815.6 に書き込まれた。

フランスは1792年当時支配していた領域を取り戻し、ロシアは大陸の指導的強国となった。

- ①フランス、スペイン、両シチリア王国で【13: 】が復活、大国の利益にそって国境線が変更された！ただし**神聖ローマ帝国は復活せず**下記②が成立。(オーストリアが帝国の名を継承)
 ②ナポレオンが樹立したライン同盟は廃止され、**35の君主国**と**4自由都市**からなる【14: 】がオーストリア帝国を議長国として発足。オーストリア帝国は、南ネーデルラント (後のベルギー) をオランダに譲るかわりに北イタリアに領土を広げ、ドイツ統一をめぐるプロイセンと主導権を争う。
 ③分割で消滅していたポーランドは、ワルシャワ大公国の大部分でポーランド王国を形成したが、ロシア皇帝はポーランド

王を兼ね、事実上それは【15: 　　】領だった。

- ④フランス革命軍の攻撃で崩壊したオランダ王国がオランダ立憲王国として復活し、南ネーデルラント（後のベルギー）を【16: 　　】から譲り受け併合した。→1830年ベルギー独立
- ⑤ウィーン議定書による主な領土変更をまとめるとこの通り。面倒でも地図で確認しよう。 11W
南ネーデルラント（オーストリア領） → オランダに併合 ……後のベルギー(1830年独立)
セイロン島（オランダ領）、ケープ植民地（オランダ領）、マルタ島、イオニア諸島 → イギリス領
ロンバルディア・ヴェネツィア → オーストリア領
ラインラント → プロイセンに併合　　ポズナン大公国（1815～48）はプロイセンの統制下に置かれた。
フィンランド・ベッサラビア → ロシア領
スイス → 永世中立国になる
ノルウェー → スウェーデン領となるが、独自の憲法を持ち、1905年に国民投票により平和的に独立した。
- 6) しかし、フランス革命とナポレオン支配によって生まれた変革の動きを押さえ込むことはできない。他民族の支配下にある地域（バルカン半島、ポーランド、アイルランドなど）、小国家群に分裂している地域（イタリア、ドイツ）では、独立や統一を求める動きが活発化した。

革命の第1波 1820年代の諸革命

1) ウィーン体制下のヨーロッパでは、19世紀前半は、ギリシア独立戦争（後掲）以外、大規模な戦争はなかったが、それぞれの国内では、自由・平等や民族の自決を求める運動が、以下のように展開された。これらについては別項で個々に詳述する。

①ラテンアメリカでは、ナポレオン時代から続いた独立運動が続行された。

ラテンアメリカでは、1804年から1825年までにカリブ海を除くほとんどの地域が独立した。メッテルニヒは干渉を試みたが、イギリスはカニング外相の主導下、ラテンアメリカ市場の開拓をねらって独立を支持し、アメリカ合衆国はモンロー宣言（1823）でヨーロッパ諸国の干渉に反対したので、ウィーン体制の列強はこれらに干渉できなかった。スペインの自由主義運動もこれに影響を与えた。

②ドイツでは、憲法制定と自由と統一を求め、イェーナ大学で結成された学生運動（【17: 　　】）が中心となって、1817年（ルター決起300周年）、ヴァルトブルクの森で大集会が開かれた。このように自由主義・国民主義の運動は学生が中心となる例が多いので、1819年、メッテルニヒの主導で、ドイツ連邦議会は【18: 　　】を行って言論統制・大学の監視を目論んだ。同年、早速ブルシェンシャフトは弾圧された。なお、フランクフルト国民議会は1848年以降である。

③スペインでは、1820年、復活したブルボン朝の専制に対し、リェーゴらがカディスでスペイン立憲革命を起こした。軍隊が蜂起して自由主義政権が樹立され、1812年の憲法を復活させた。1823年、革命の波及を恐れる「神聖同盟」の発動でフランス軍が派遣され挫折した。 11W

1808～14年のスペイン反乱との混同に注意せよ。なお、スペイン内戦というと1936～39年の内戦を指す。

④イタリアのナポリでは、1820年、秘密結社【19: 　　】が決起した（ナポリ蜂起）。1821年、ピエモンテでも蜂起した（ピエモンテ蜂起）。派遣されたオーストリア軍により粉砕された！ 11W

⑤ロシアでは、ナポレオン戦争に従軍して西欧の自由主義精神を学んだ青年貴族将校らが、憲法制定や農奴制・ツァーリズムの廃止等を要求して、1825年、【20: 　　】を起したが、ニコライ1世に鎮圧された。デカブリストとは十二月党员という意味。

約半世紀後の1870年代のナロードニキの運動と混同しないように。その合い言葉は「ヴ=ナロード」（人民の中へ）。共通点は運動の担い手が貴族など恵まれた階層の理想主義的な青年たちであるということ。いつの時代も青年たちは社会進歩を願い、恐れを知らないのである。諸君はどうだろうか。

⑥ポーランド（事実上ロシア領）、東ヨーロッパ地域（事実上オーストリア帝国が支配）では、民族の自由を求める運動が始まった。

2) 上の(1)で見たような1820年代の民衆運動は①を除いてウィーン体制によって粉砕された！

こうしたウィーン体制による抑圧は、逆に政治参加や自由の拡大を求める運動を、ヨーロッパ各地で刺激してしまった。ウィーン体制はラテンアメリカから崩れ始め、ついにヨーロッパでも一角が崩された。次の通りである。

3) 1821-29年、【21: 　　】独立戦争：ついに【22: 　　】からの独立を達成した。

そのいきさつはこうである。ギリシアが1822年に独立を宣言すると、オスマン帝国はエジプト軍を出動させ鎮圧をはかった。西欧の義勇軍がギリシアを支援し、東地中海進出の野望を持つイギリス、フランス、ロシアが介入 11W した。1829年、【23: 　　】で独立が承認された。この条約で、オスマン帝国は黒海北岸をロシアに割譲した。典型的な東方問題である。英仏がギリシアの完全独立を承認したのは1830年の【24: 　　】においてである。なお、ギリシア独立戦争にはイギリスのロマン派詩人【25: 　　】が義勇兵として参加し 11W 他、病死している。

以下の3つの作品を見分けさせる問題は実際に出題された。2009早稲田 図説資料集等で見ておくこと。

- ①『シオの虐殺』（ドラクロワ 1824年制作）：ギリシア独立戦争の際、オスマン帝国軍のキオス島（シオ島）での残虐行為（住民2万2千人を虐殺）を描き、ギリシア支援を世界に訴えたもの。
- ②『1808年5月3日の処刑』（ゴヤ 1814年制作）：はスペイン反乱（1808～14年）におけるナポレオン軍の熾烈な報復を描いている。
- ③『ゲルニカ』（ピカソ 1937年制作）：スペイン内戦中、ドイツ空軍のコンドル軍団が行った地方都市ゲルニカに対する無差別爆撃を世界に告発する作品。反戦・抵抗のシンボリック的存在。